

仙台エマオでの被災支援ボランティアに参加して ——

「夏に草抜きをした土地には、青々と野菜の葉っぱが茂っていた！！」

山本 安生（鹿島教会）

今回は2回目のボランティアとして、10月30日（火）夜～11月1日（木）迄の2日間、エマオに行ってきました。この時期はボランティアが少ないと聞いていたのですが、この2日間は我々関東教区4名と京都教区の1名、そして西東京教区8名と、東京・多摩地区からの女性3名が主なボランティアでした。

2日間、私の担当は現地の田んぼのガレキと石を拾う作業でした。1日目に案内されて着いた所は、なんとこの夏、暑い日差しの中を高校生や若い人たちと草抜きをした畑の隣の土地でした。元は田んぼでしたが、まだ水を引いてないので、少し凹んだ荒地のように見えました。

そのむこうの、夏に草むしりをした土地は、**驚いたことに、青々と野菜（大根？）の葉っぱが茂っている畑になっているのです。**夏の草抜き作業は、20人位でかかっても畑全体の2分の1位までやったところで時間が来てしまって、「この後どれほどの時間と労力がかかることだろうか」と暑さの中で思うのみでした。このように野菜が茂っている様子など想像もできなかった自分への恥ずかしさと同時に、野菜の生命力とリピーターとして何度も同じ土地に来ることで、被災地の復興していく様子が見られるという喜びが感じられて、大変感動しました。

後で聞くと、ここまでにするには、草抜きの後、石やガレキ拾い— 機械で掘り返す—作業を何回も何回もやったということでした。それには、多くのボランティアと土地の人たちの復興への熱意と継続した働き（労働）があったからだと思います。

このような話を、すぐに近くにいた人たちに話したら、「この次来る時は、田んぼに稲が実っているところが見られるといいね！」という人もいました。

まだボランティアとして行ったことのない方へ、今必要とされている作業は、畑の石拾いくらいの極めて簡単な、しかし畑や田んぼの再作付には必要不可欠な作業です。シニア世代でもできる仕事になっています。ぜひ、現地に行くことをお勧めいたします。

「出来ることがあれば訪れてみる」

西川 幸作（三条教会）

10月28日（日）夕方から11月1日（木）までの5日間、私は教区被災支援委員会が呼びかけられた被災地ボランティアに行ってきました。ワークをした場所は仙台市若林区にある笹屋敷という所でした。毎朝、被災者支援センターエマオから自転車で約40分かけてワーク先へと向かいました。この自転車の移動は体力を消耗するのですが、しかし私はその移動が嫌ではなく、むしろその行き帰りに見える景色がとてもきれいで心が慰められる思いがしました。既に瓦礫等はなくなり畑には緑の野菜が植えられ新米の収穫が終わった田んぼが一面に広がっていました。新潟の田園風景に似て懐かしささえ覚えました。

私は、今回4日間とも同じKさん宅でのワークとなりました。私はKさん宅内にある津波で破損したビニールハウスを組み立て直す作業をしました(3・11のときには約1メートルの津波がやってきたそうです)。実際にその作業を試みますと素人では結構難しく、一つ一つ丁寧にKさんの指示を聞いて行いました。まさにエマオが大切にしているスロワークの状態でした。このワークを毎日していったおかげで私はKさんご夫妻と仲良くなりました。

ある時、Kさんは私に押し寄せる津波から車で必死に逃げたときのことを語って下さいました。そのとき私はただそのお話を聴くのみでした。しかしその後、ボランティアは実際にワークをするだけでなく人々の話を聴くことも大切であると思われました。

ワーク最終日、私は午前中だけ作業をしてKさんとお別れをして新潟へと帰りました。

これからも何か出来ることがあれば被災地へと足を運びたいと思っています。最後に今回のボランティアを企画して下さいました教区の被災支援委員会の皆様、引率をして下さいました小林祥人先生に心より感謝申し上げます。

東北被災者支援ボランティアに参加して

赤沼 讚四郎（飯能教会）

被災地に行って、「自分は何が出来るのだろうか」、未曾有の大惨事に対し、ボランティアの経験のない高齢の私に五日間の作業と生活は足手まといになるのでは？がスタートでした。

今回のワーカーは毎日入れ替わりがあるも 20 名程度／日、全国の教区から来て職務は牧師、教師、保育士、女子大生、サラリーマン、主婦と様々。期間は日帰り、2～3 日、5～6 日とこれも様々。宿泊と食事は寝袋、昼食のみ自己調達であるもほとんど用意されており心配ない。特に夕食は東京や地元の方のボランティアで用意され、暖かく、美味しく、食べ放題、ご馳走で大変有難かった。

ボランティア作業は昨年の被災当時から比べると、異なる。仙台エマオのスタッフの支持の下、我々 2～4 名／グループ、4～6 グループに分かれ、津波被害を受けた農家に向かう。主な作業は「畑の野菜の植えつけ、収穫、草取り」「田んぼのガレキ除去」「農業ハウスの復旧・設置」「独り暮らし宅のトイレ・風呂の掃除、茶飲み話」「仮設住宅でのラジオ体操、茶飲み話、編物」等。午前、午後各 2 時間の作業だが現地までは自転車片道 1 時間（帰りも同じ）、これがかかりきつかった。

ボランティアの感想としては五日間では、大したことは出来なかったと思うし、空虚感もあるが、ほんの小さな「点」にしか満たない作業でも（昨年からの仙台エマオさんやワーカーの皆さんの大きな復興支援に比べれば一万分の一、一億分の一に満たない小さな作業でしょう）しかし、今回、仲間と一緒に支援作業し、これからも誰かが続けてくれることを（出来れば自分も）考えれば、その小さな「点」が繋がり「線」に、「面」に、そして「立体」という大きな「復興作品」になると思う。「継続」それによって、「復興東北」を願って、信じています。（世間ではこれを「絆」というのでしょうか）

最後に「荒浜」という、青く、きれいで、広い海岸に立って海を見、また反対側の「若林地区」や山々を見て、そして目を閉じる。ここに数十mの高さの津波が来て人々を、家を、畑を一瞬のうちに奪い去ったことを思うと自分は、いったい何が出来るのか、どうしたら良いかを考え祈りました。

仙台・七郷地区ボランティア報告

小林 祥人（取手伝道所）

10月29日より今月2日まで、関東教区は仙台・七郷地区で展開されるボランティアにワーカーを派遣することができました。今回教区からの参加は6名。少ないように見えるでしょうか？でもこの週の参加者全体の三分の一から二分の一に達する人数でした。諸教会・伝道所の皆さまの祈りに支えられ、関東のような広い教区のさまざまな地域から集まって、気持ちを一つにしてある事に取り組むことができるというところに、大きな喜びを感じることができ、とても嬉しい思いがしました。ニュースレターを各教会で読んでもらっていると話す、被災者支援センター・エマオのスタッフの方々もとても喜んでいました。そのニュースレターにも詳しいですが、効率よりも信頼によるつながりで被災の現場に寄り添う、というのがエマオの大切にしているところです。私たちもまたこれを覚えてワークに従事しました。内容的には被災地域に住む方々の傾聴・被災したお宅の設備の修繕・畑や田んぼの細かな瓦礫除去などです。これらはいずれも小さな働きのように感じられるかもしれませんが、実は復興への歩みの着実な一歩でもあるのでしょうか。だからこそ「一人でも、一日でも」ボランティアに参加してほしいというエマオの方々の声は、希望をともなう祈りとして、切実に私たちに響いてくるのです。

ここからは次回ボランティアの募集についてのお知らせです。実は今月18日から始まる週ですが、現在エマオに登録しているワーカーがほとんどいない状態で、たいへん困っていると聞いています。もとより秋から冬にかけては参加者が集まりにくいということがあります。11月はこの週だけが空白になってしまっているということです。急な募集なのですが、**11月19日から22日までのボランティア・ワークに参加できる方**（18日夜からの前泊も可能です）は、被災支援委員会・小林まで（19・20日の引率担当）ご連絡ください（090 - 3529 - 5140 mail@torideyochien.jp）。